



# ミニシアター140



HALTO

涙を乾かし出勤すれば天敵上司主催の飲み会デー。  
案の定、宴はカラオケへ。

歌え歌えと囃し立てる男ら。  
仕方ない、一曲歌えばそれで済む。  
無意識にいつものコードをリモコンで転送。  
イントロが流れて気づく…

いつも彼が上手いねといってくれたあの歌は  
今日からナキウタになっていた。

双子の野球兄弟がいた。

違いといえば利き腕が違うこと。

弟が期待の左腕とドラフトに指名されるも

兄には声が掛からず。

共にした野球人生に明暗が射す。

その後、弟が入団発表直前まで行方不明。

煌びやかなライトを浴びてポーズを取る若者。

ボールを握っていたのは右手だった。

コンビニで些細なことから喧嘩が始まると  
突然、土砂降りの雨が。

「チェッ」

アイツがしかたなくビニール傘を買う。  
行きはラブラブ、帰りはお通夜。  
アパートが遠くにじんで見える。

「じゃあ」も何もなく立ち去るアイツ。

その右側だけずぶ濡れの後姿を見て  
再び雨の中に飛び込んだ..。

アルバイト先のピザ屋は  
書き入れどきになると厨房は戦場と化す。

配達のアイツはいつもの調子で  
「♪行ってきま～す」

この前、いいな配達は気楽でって言ったら  
「出てく時、エールを送るよ」

右のウィンカー3回、  
左のウィンカー3回、  
ハザードランプ7回。  
あんたは応援団長か！

目を疑った—

文芸誌を棚に並べると必ずやってくる男。  
無造作に手に取りあるページを一瞥するだけで  
いつもはそそくさと店を後にする。

その男が今、全身を震わせながら  
一心不乱に一点を見つめている。  
今号にはそんなすごい小説が？

男が放置し、開かれたままのページには  
入選の文字があった。

「課長、また来ましたよ、あの営業マン」

「しつこいなあ。外出中でよかったよ」

「今日はこれを渡してほしいって」

「なんだ名刺か」

「あの人、課長に会うまでずっと来ますよ、きっと」

「どうしてだ」

「名刺見てください」

「全く。未来商事、田峰英太...タミネエイタ...」

今日卒業式は  
中学3年間そっと胸にしまっておいた  
乙女心に決着をつける日でもある。

放課後、桜の木の下で  
何度もリハーサルした言葉を  
憧れの男子に伝えると  
「実は俺も入学式の時から」

ときめきはためいきに変わった。

あんたねえ、いったい何してたの。  
3年ものあいだ。



誰かにつけられているような気がする？

それで探偵の私の所へ。よろしい。

それではしばらく貴方を尾行調査してみましよう—

一週間、様子を見ましたが不審な人物は特に。

思い込みかもしれませんね。

報酬の方は振込で。ではお気をつけて。

さてと、次はどの娘にするかな。